

### 3年間の集大成

総合福祉学科3年 石川 璃央菜

総合福祉学科の3年生14名は、自分たちが興味関心のある福祉分野に分かれ1年間卒業研究に取り組んだ。当事者の方へのインタビューや現場への訪問調査、他学科の学生へのアンケート調査等必要なデータや情報を集め分析し、先生方からアドバイスをいただきながらも自らの力で完成させることができた。そして3年生最後の見せ場である卒業研究発表会。発表内容やプレゼン方法、資料に至る隅々までこだわり最高の発表を行うことができた。私のグループは、LGBTQのパートナーシップ制度について研究発表を行った。当事者の方との関わり、皆さまに伝える力、チームでの協力、学校全体を巻き込む形、これまで学んできた力、研究中に培った力を全面に出し切り、まさに集大成としての形で表現できたと満足している。今後この力を、利用者様にとって必要な地域との関わりや社会資源の活用に活かし、必要とされる社会福祉士を目指していきたい。

### ケアスタを終えて

総合福祉学科2年 大畑 悠斗

ケアスタの期間は私にとって、自分と向き合う機会になりました。3期、4期とも自信を持てるような実習ができなかったことや、進め方が分からなかったことで準備がなかなか進みませんでした。加えて、先生に助けを求めてもいいのかどうかもわからずにいました。しかし、先生は「もっと人を頼ってもいい」、「自信を持っていい」と言ってくださりました。ご指導いただいているうちに自分でも、「絶対に良い発表にしたい」と思うようになりました。パワーポイントと発表の原稿は、自分の伝えたいことがしっかりと伝わるように作りました。パワーポイントは大事な部分だけを文字にし、見やすさを重視しました。発表も過度に緊張せず、自分らしくできたと思います。クラスメイトや先生方に「良かったよ!」と言ってもらえて嬉しかったです。

### ケアスタを終えて

介護福祉学科2年 寺尾 みなみ

ケアスタディ発表会を終えて自分が1番感じたことは「成長」です。1年前、先輩方のケアスタディ発表を聞き感銘を受けると同時に(来年は自分達の番か)と不安な気持ちが大きくありました。2年生になり長期の実習を行う中で分からないことにぶつかりながらも学ぶ事が本当に沢山ありました。そして、自分にとってその学びが大きな自信へと変わっていった気がします。自分含め皆が成長したからこそ、最後の集大成であるケアスタディ発表会を無事やり遂げることができたと感じます。2年間という短い期間の中で実習や就職活動、国家試験、そしてケアスタディ発表会を終え、今までにないくら

いの達成感があります。1日1日が自分にとって貴重な時間だったと今になって感じます。それくらいあつという間の2年間でした。

### 臨地実習報告

視能訓練士学科 遠藤 結希未

今回、卒業研究発表会を聞いて、学科が違うにもかかわらず、とても勉強になりました。特に印象に残っているのが、盲導犬に関する発表と点字に関する発表です。私は視能訓練士学科で眼に関する検査や疾患について学んでいるのですが、盲導犬や点字のことを詳しく聞いたのは初めてでした。眼が見えなくなると、どんな風に見えるのか考えたことがありましたが、実際にどのように過ごしているかまでは、考えたことがありませんでした。盲導犬を連れている方に対して、こちらが悪気なく行ったことが、かえって迷惑になることがあると学んだので、街で見かけた際はその点に気を付けて、必要であれば手を差し伸べたいと感じました。また、今後眼科でそのような患者さんを見かけた際は、今回学んだことを活かして対応したいと思いました。



### 3月の行事

- 1日(水) J・B検CBT 16:30~
- 2日(木) オープンキャンパス 17:00~
- 6日(月) 進級・卒業判定会議
- 8日(水) 第5回入学選考
- 14日(火) オープンキャンパス 17:00~
- 16日(木) 登校日(全学年)、大掃除 本部大掃除
- 17日(金) 同窓会入会式 幼稚園卒業式
- 18日(土) 終業式・卒業式・謝恩会
- 21日(火) 春分の日
- 22日(水) 新入生オリエンテーション  
(E10:30、W13:30、豊岡W修了後)
- 25日(土) オープンキャンパス 13:15~
- 31日(金) 最終入学選考 保育園「お別れ会」  
新入生オリエンテーション(未参加者) 職員会議

公益社団法人静岡県職業教育振興会  
 令和4年度静岡県私立専修学校各種学校大会  
 研究論文 第1位受賞!!


 「3年間で見つけた自分の強み」

子ども心理学科3年 亀川 萌

私がこの3年間継続して頑張ったことは、放課後等デイサービスでのアルバイトである。放課後等デイサービスは、平成24年に児童福祉法に位置づけられた施設である。障害のある子どもに対し、個々に応じた発達支援を行うことにより、「子どもの最善の利益の保障と健全な育成を図ること」とされている。私は特に発達障害を抱える子どもたちと関わり、子どもたちが無理することなく自分の居場所を見つけられるよう支援することを目的に生活支援をしてきた。3年間の経験の中で、子どもを深く理解するために必要なこと、子どもとの関わり方、適度な距離感、生活支援・心のケアの仕方等を学ぶことができた。

はじめは発達障害について知識がなく、子どもたちを理解することに苦戦した。障害の種類は同じでも一人ひとり全く違う人間なので、接し方も考えた。障害の度合いも、軽度の子から重度の子がいて、子どもたち同士の関わり合いも難しく、常に目を離さず接した。その中で、ADHD（注意欠陥・多動性障害）を抱えるA君と関わり、様々なことを学んだ。

A君はいつも宿題を全くやらない。そのことで頻りに保護者に叱られるため、自己肯定感がとても低い。保護者がその子に求めるレベルと、その子の現状との差が大きすぎるあまり、本人の負担になっているように感じていた。何度声を掛けてもA君が日記の宿題をしないため、ある日、私はA君と時間を設けて話し合った。A君は「俺は、なんて言われても日記はやらない。そもそも書く内容がないし」と言った。私は、A君の力なら日記は書けるはずだと思っていたので、やりたくない気持ちに焦点を当てることにした。「やりたくないのは書く内容がないって言うだけだけど、本当はお母さんにお出かけ連れてってもらいたいんじゃない？」と聞くと、A君の目から涙が落ちた。私が、自分も子どもの頃、彼と同じような寂しさを感じていたことを伝え、A君はさらに、本当は周りの友達みたいに県外旅行に行ってみたくいけれど、自分のお母さんは仕事ばかりだと、と吐露した。さらに「周りの人の日記見るのも辛いよ。日記なんて書きたい人だけ書けばいいんだよ。俺なんて、何をしても親から怒られるだけで、何を日記に残せばいいんだよ」と泣きながら伝えてくれた。「辛かったね。よく頑張ってきたね。A君は偉いよ。やればできる子だよ。ちゃんと分ってるよ。お出かけしたいんだよ。分かるよ」とA君に伝え頭を撫でると、A君はあふれ出す涙を服の袖で拭き続けた。話し合いの最後に、「私が伝えたことは全部A君のためだよ。『お母さんが褒めてくれないから』『叱ってばかりだから』って宿題をやらないのは、

A君が損をすることになる」と説明して、ちゃんと私はA君のことを見ていて、頑張った分褒めるから一緒に頑張ろうと伝えた。その後からはA君は私に対してわざと悪いことや困ることをする、いわゆる『試し行動』を見せるようになった。自分が何をしてもこの人は自分を見捨てない大人なのか、を確認しようとするところに、愛着障害を感じるが、これを乗り越えたらきっと彼の中で何かが変わるだろうと信じ、粘り強く向き合っていくことにした。

私は、A君をはじめとする子どもたちと接してきて、3つのことに気づいた。1つ目は、子どもたちは自分の気持ちを何かしらの方法で表現して伝えようとしているということだ。支援する側はそのサインに気づき、その心を受け止めるよう努力することが大切だと感じた。2つ目は、保護者が子どもに求めるレベルとその子の現状の差が大きいと、子どもにとって大きな負担になることだ。子どもたちの中には発達障害ではなくPTSD（心的外傷後ストレス障害）を抱える子もいて、放課後等デイサービスでは、子どもたちの心のケアも大切にしている。これが3つ目の学びである。

一人ひとり、学んでほしいことや必要な支援などを考えるとたくさんありすぎて、どう支援していくべきか行き詰ってしまったこともあったが、そんな時は子どもの居場所作りを目的とした事業所だということ思い出し、子どもの気持ちを一番に大切にするようにしてきた。私は3年間で多くのことを学び・経験させてもらった。中でもA君のような、『悲しみを抱えた子の気持ちに寄り添える』ことは、私にしかできない・私にしかない『強み』だと感じている。

これからの子どもたちとの関わりの中で更に学び、学び続け、共に成長していける保育士を目指していきたい。そして私が保育士になったら、子どもたちが自分の居場所を見つけ、のびのびと成長していけるように、一人ひとりと丁寧に関わり、心に寄り添って発達や成長を支えていきたいと思う。

## ◇令和4年度研究論文の審査結果と講評

審査者：梅澤 収（静岡大学特任教授）

2022年はウクライナ戦争や元首相の銃撃事件や急激な円安と物価高で暗い世情でしたが、サッカーW杯・カタール大会での森保ジャパンの活躍は日本に勇気と明るさを与えてくれました。

さて、新型コロナ感染の発生から間もなく3年経過し、with コロナの教育環境や就職状況のステージに入っていますが、今年度8校から32点の研究論文の応募がありました。前年度の30点を超える論文の応募数があったことは大変うれしく思います。応募していただいた学生・生徒のみなさんにとっても感謝しています。

今年度3回目の審査を担当することになり、研究論文の一つ一つをじっくりと読ませていただきました。今回はコロナ体験から家族や学校・仲間等を問い直し、自己の生き方や職業観を見つめたことが作品にも反映

されていました。昨年同様に感じたことは、専門学校の学びに触発された内容を読み取ることができて、普通教育にはない、職業教育の持つ固有（独自）の魅力（教育力）を感じました。高校卒業後に専修学校（専門課程）に入学した「学生」、社会人（就職→退職後）になってから専修学校で学んでいる者、高校に相当する高等課程で学ぶ「生徒」など、多様な学生・生徒が応募してくれました。外国にルーツを持つ若者の応募も増えてきて多様な観点から専門学校で学ぶ方々の考えやあり様（ありよう）を知ることができました。

そのような内容を持つ諸論文の審査にあたり、どんな基準で審査を行うのかが問われますが、分析的な（外形的）な選定基準を次のように設定します（これは昨年と同様です）。

1. 「自分ごと」のテーマ設定がなされ、自己の体験や学びを通じた省察が行われているか。
2. ①設定＜課題の設定＞、②展開＜内容の展開＞、③まとめ＜結論と今後の課題＞のようにしっかりと研究論文が構成されているか。
3. 表現方法について、①「自分ならではの」（自分の言葉）による表現がなされているか、②参考文献や引用の表記が①と区別して適切になされているか。

3つの基準は評価を行うための分析的な（外形的）基準であり、さらに論文の内容（表現）が「どの程度胸に刺さるか（感動を与えるか）」を重視します。その結果、次のような審査結果となりました。その結果と評価理由を述べます。



## ☆講評

論者は、子ども心理学科に通う学生ですが、3年間の放課後等デイサービスのバイト経験で発達障害（ADHD）を抱えるA君との具体的なやり取りを通じて得た経験をエピソードとして紹介しています。「日記は絶対に書かない！」「書く内容がない！」と固辞するA君を、書ける力は十分にあると見た論者は、A君とじっくり話していくことで彼の本当の気持ちを引き出すこととなります。その彼との会話の遣り取りとその後の彼の行動（試し行動等で行きつ戻りつがある）が、臨場感ある記述となっています。そして、このエピソードの省察から、3つの「気づき」を的確に整理し、将来の職業として保育士をめざす私の「強み」を自覚します。そのような論文の内容が、見事な構成と文章で表現されていると思います。

以上、A君への発達支援の経験から子どもも支援で大切な点を導き出して、将来保育士をめざしている「私の強み」を自覚するに至った内容が、見事な構成力と文章構成力で展開していることを高く評価し、第1位に選定しました。